

## 「良寛和尚曰く・・・」

宮下 智

「自立とは何か?」、この設問は、知的障がいの方々、特に多くの支援を日常的に必要としている障がいの重い方々の支援を考える上で、その昔から避けて通れない命題ですから、知的障がい者支援の関係者であれば誰もが一度は考えたことがあるのだと思います。が、一歩進んで、「知的障がい者は、なぜ、そしてどのように自立しなくてはならないのか?」についてきちんとした答えをお持ちの方は少ないのではないかと思います。というのは、障がいが重くなればなるほど、自分一人ではできることが少ないわけですから、「できることが増えていく」という世間常識的な自立の概念からは、なかなか答えを導き出すことが難しいからです。

その考えるヒントを私はあの良寛さんの次のような逸話からいただきました。

良寛さんは、ある時、村の庄屋さんから「縁起のいい言葉を書いてほしい」と頼まれました。村の庄屋さんは、あの良寛さんですから、どんなにか素晴らしい言葉が返ってくるのではないかと大きな期待をしたのですが、その書には、『親死に、子死に、孫死ぬ』と書いてあったのです。庄屋さんは、「死ぬなんて縁起の悪いことを書くのはけしからん」と怒りましたが、良寛さんは笑って答えたのです。

「それでは『孫死に、子死に、親死ぬ』の逆縁だったらどうだね?これこそ不幸で縁起の悪いことだろう。『親死に、子死に、孫死ぬ』の順縁こそが、幸せな縁起の良い言葉じゃないか。」と。この話に出会った時、私の頭の中にはいくつものシーンが同時に駆け巡りました。

全て、もう三十年も昔のできごとですから、ここで紹介することを許して頂いて、そのいくつかを述べてみたいと思います。

一つには、高校生の息子を突然の交通事故で亡くした職員のお葬式で、同級生と思しき十代の若者たちが、何十人も泣き崩れている姿です。「子が先に死んじゃだめだよなあ・・・」憔悴した母親の姿と併せて本当に悲しいできごとでした。

その頃、学園のメンバーさん方のお葬式がいくつか続きました。お葬式も終盤に差し掛かった頃、私はご両親に手招きされて、皆さんからは見えない柱の陰に居ました。ご両親は私に言います。「若園長先生、今日は本当にありがとうございました。今日は確かに娘が亡くなって悲しい日ですが、実は娘が親より早く亡くなってホッとしている気持ちもあるんですよ。これで安心して私たちも死んでいくことができます。でも、若園長先生、このことは誰にも言わないでくださいね。」

良寛さんは、「順縁」こそが幸せだという。が、知的障がいのある子がいる家庭にあっては「逆縁」こそが幸せなのだ。

しかし、「逆縁」は、子にとっては悲しい。「お前が私たちより早く亡くなって欲しい」にどんな顔をして子は答えればいいのか。

知的障がいのいる家庭であっても「順縁」こそが幸せであると、確信を持って伝えることができる専門性を身につけたいと、強く思った瞬間でした。

そして、四年前、平成二十七年三月十一日、政府主催の東日本大震災追悼式で、遺族代表として発表した菅原彩加さんの言葉は、私たちの目指している支援の方向性に示唆的です。

「あの日、中学校の卒業式が終わり家に帰ると大きな地震が起き、津波が一瞬にして私たち家族五人をのみ込みました。瓦礫の下で動けなくなった母を見つけ、瓦礫をよけようと頑張りましたが、私一人にはどうにもならないほどの重さ、大きさでした。母のことを助けたいけれど、ここにいたら私も流されて死んでしまう。『行かないで』という母に私は『ありがとう、大好きだよ』と伝え、近くにあった小学校へと泳いで渡り、一夜を明かしました。」

母親をおいて逃げなければならなかったその時、娘が母に伝えた最後の言葉は、「感謝の言葉、ありがとうと大好き」だったのです。そして彼女はこう続けました。

「被災した方々の心から震災の悲しみが消えることは無いと思います。しかし前向きに頑張って生きていくことこそが、亡くなった家族への恩返しだと思うとともに、私のあいさつでちょっと頑張ろうかなと思ってくれる人がいたらうれしいです」と。

親亡きあと、子が前向きに頑張って生きていく姿を保証することができるなら、その子に障がいがあっても無くても「順縁」こそが幸せなのだと考えることができます。

しかし、これには条件がありそうです。親が亡くなるその時に、特に重い知的障がいのある方が、「ありがとう、大好きだよ」とどのように伝えることができるのか、そしてそのような気持ちになることが可能なのか、という命題です。

A男さんは、今までに職員が作って渡していたにもかかわらず、使ってくれなかった帰園日を明確に視覚的に示したカレンダーをご両親が使ってくれた日から、帰省中の不眠が解消されました。父親は言ったものです。「A男もなかなか頭が良い」と。父親が初めてA男さんの実力を認めたくれた日でした。

B男さん、入所以来、ずっと野球帽をかぶりっぱなしです。あるとき、抜毛が激しく続き、相談の末、彼の希望が「髪を染めたい」にあることがわかりました。その希望を母親に伝えたときの答えは、「似合うかもね、良いわよ」と一発回答の快諾でした。髪を染めたその日から、彼は何年もかぶり続けていた野球帽をかぶらなくなったのです。ちょっぴりの非行気分を否定することをしないで受け入れてくれた母親の姿でした。

C子さん、一日に何回となく大声が出て、それが十分、二十分と続きます。あるとき、入所以来、五十年近く参加し続けてきた行事への画一的な集団参加をC子さんのペースを大事にした個別的な参加方法へと変更したいことをご両親に提案しました。当日、列からはみ出してフラフラ動いてしまう娘を温かく見守ってくれるご両親の姿がありました。「自分らしい行事参加の姿」を認めるたびに彼女の大声の姿は減じていったのです。

D子さん、入所以来続いている家族参加の旅行にご家族が参加するのを断る大決心をしました。さすがに直接伝える勇気がちょっぴり足らなかった彼女は、職員の代筆の助けを借りて手紙で気持ちを伝えることになりました。返事が来るまでドキドキでしたが、これも自立の一つの姿であることを職員の説明でわかっていたことができ、彼女は当日他のメンバーとともにカラオケで楽しい時間を過ごすことができたのです。その日を境にますます穏やかに過ごす時間が増えていくD子さんでした。

E男さん、何十年もの間、母親の都合の良い旗日に帰省することを習慣にしていました。自閉症度の高い彼です。長い習慣でマイルール化してしまっていたのでしょう。母親の仕事が変わって旗日での帰省が困難になり、帰省日の調整ができなかったとき、彼の顔は自傷でかさぶただらけ、血だらけになってしまいました。その時、母親が解雇覚悟で会社と休日の交渉をしてくれたのでした。母親の都合に合わせていた帰省日が彼の都合に合わせて形になったのです。不思議なことに彼の帰省日はその後とても融通のつく形に変わっていきます。

親子の間で繰り返される「ゆずったりゆずられたりの姿」、それが「ありがとう」と「大好き」を生み出すのだと私は信じています。そしてそれは、障がいがあっても無くても変わらない姿であることを明星学園の実践は教えてくれています。

どんなに知的障がいが高くても、意思のある存在であり、対等に「ゆずったり、ゆずられたりする」ことができる存在であることにご両親がたどり着いたとき、そこに感謝が生まれるのです。

「お父さん、お母さん、いつもお世話をかけっぱなしでごめんなさい。でもこんな私のことをいつも認めてくれるお父さんやお母さんのこと、大好きです。そしていつも感謝しています」ほら、やっぱり「順縁」が幸せでしょ！

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>